慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	米津教授 生涯義塾法学部を愛し続けて逝かれた先生を悼む
Sub Title	
Author	堀江, 湛(Horie, Fukashi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.10 (2011. 10) ,p.123- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 米津昭子先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20111028-0123

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

米津教授　生涯義塾法学部を愛し続けて逝かれた先生を悼む

一九八五年秋私は教授会から学部長就任を命じられた。当時大学紛争の時期は過ぎ、各学部は学部改革を競っていた。いうまでもなく法学部の教員は法律、政治、教養の三部門の教員団からなる。専攻が違えば教員のものの考え方も異なり教育の仕方にも相違が生じる。しかし当時法学部教員団は全塾各学部の中で最もまとまりがよいとお互い自負していた。

この良き伝統を守りながら法学部の学部改革とその地位向上を図るにはどうしたらよいか、学部長の初仕事は米津先生を学部長補佐に引っ張り出すことだった。教員団の一体性を守りながら大胆な学部改革を進めるには先生の力が不可欠と考えたからだ。

実はこの知恵は米津先生とともに旧制大学最後の編入試験で入学された先生の歴戦の戦友、しかも私にとっては中村菊男門下の先輩で過日世を去られた利光三津夫教授の強力な示唆によるものだった。利光先生は雑務の処理は大の苦手、しかし何しろ大化の改新以来の政治抗争の歴史がご専門、政治的勘は抜群、ついでながら学部の活性化は大学院が研究者志望の学生で溢れることだが、この研究者養成でも先生の目に狂いはなかった。

当時大手予備校のわが法学部の偏差値は下がる一方だった。受験生の人生に対する抱負識見や基礎学力の低下は否定できない。しかもこれは塾内高校の特に政治学科への進学者の成績低下という深刻な問題を伴っていた。もちろん日吉の塾高に長逗留はしたが今では勤務先随一のやり手に成長した往年のゼミ生も枚挙に暇はないが。

われわれの結論は受験生の評判は悪いが一般入試の二次面接と小論文は継続し、調査書の評定平均値、小論文、面接もすべて点数化の上活用し総合評点で合否を決めるというものだった。結果は予想外の成功で、合格者の大半が生きのいい現役で占められ、学生部を悩ます五月病患者は法学部だけは無縁になった。

入試の激化で全国の高校は三年後期になると授業は受験一色になる。この弊害を除くため九月初めに推薦入試を導入、最後の半年も受験にとらわれず勉学に専念できる道を開いた。さらにセンターテストへの参加、帰国子

女入試など文部省の要請する新入試制度にはすべて協力し、結果的に一般入試の定員は著しく減少した。この結果、受験界の偏差値では早稲田の政経と覇を競うところまで回復した。

この前後、政治学科内から一貫教育といいながら慶應義塾女子高校からの入学が少ないとの声が上がり、女子高の協力を得て、同校に学科の内容と面白さを伝える演習の設置が決まった。父兄も息子の進学にはこだわるが娘には甘い。若き日の曽根、国分といった学部の誇るスターを繰り出し、女子高からの入学者増加に成功した。一方法律学科では女子高出身者の司法試験現役合格者が輩出し、受験界の法律学科の地位と性格は一変した。

口で言うのは簡単だがこれまでのやり方を変えるのは容易ではない。少なくとも私が学部長時代、学部長、学部長補佐と所管の委員長、委員等との懇談でも米津先生は辛抱強く委員長、委員の声に耳を傾け、時には厳として実施の必要を説き、代議員会、教授会では基本的にはその結論をすんなり通してしまう先生のまとめ役としてのお力にはいつも舌を巻かされた。

戦後教育改革が行われるまで中等教育以上は男女別学だった。高等教育は大学と大学予科または旧制高校の本流と傍系高等専門学校の二本柱、男子のみで、女子については女子専門学校が最高学府とされていた。

昭和二〇年秋占領軍の強い要請による閣議了解で大学の女性への開放と共学化、女子大学設置の方針が認められ、他方文部省は終戦処理として陸海軍の学校の卒業生、在学生の大学、高専への転入学と大戦中大幅に理科系に回された定員を元に戻す旧制高校理科在学生の文科への転入を認めた。これら戦争直後の改革で米津先生は女子専門の実践から、利光先生は旧制高校扱いの学習院理科から塾の旧制法学部に揃って転入された。

戦争直後の改革と時の小泉信三塾長の積極姿勢で塾法律学科はやがて軍の学校から転入された平、金子、田口のお三方が、また、全国法学部で例のない、人見、中谷、米津の女専からの転入によるお三方に新制三期の林脇を加えた女性お四方がいずれも教授に昇進され法律学科の教授陣の中核を構成されるというユニークな学部になった。しかも米津先生は全国初の商法教授の座を勝ち取られた。

先生のお父上米津藤一氏は愛知県三河の名家のご出身

で中大法学部をご卒業、大正期に将来の政友会総裁にも擬せられた横田仙之助の政治秘書になられたが、一九二五年同氏の急逝にあい、その後在日中国人の世話活動等に尽力されたと聞く。戦後東京裁判その他で来日した米国法律家との接触も多く米津先生の流暢な英語もこれら接触を通じて磨かれたもののようだ。先生の塾法学部への進学もお父上の強い影響があったと思われる。

実は先生には一緒に塾に入学された一卵性双生児の妹さんがおられた。この方は後お父上昵懇の米国法律家の子息と結ばれて米国に移住された。しかし当時お二人は卒業と同時に塾副手に採用され、学年末試験等ではよく連れ立って大教室の監督に加わられた。持ち込み不可なのに机いっぱいノートや書物を広げている不心得者がいる。目ざとく見つけたおひとりの米津先生が「いけませんよ、お仕舞なさい」とやんわり注意されて前方に進まれる。先生との距離を見計らって作業再開答案用紙に身構えると、突然頭の上から「駄目じゃないの」との厳しいお声、顔をあげるともう一人の米津先生が怖いお顔で立っておられる。思わず「ずるい」と叫んだという話は私の学生時代にも語り継がれていた。温みのあるしかしある一線を超えることは許さない先生のお人柄が窺えるところが味噌だ。

米津先生は御定年にあたり大学院の講義と家裁の調停委員を除いては他大学からの招聘は一切お断りになった。それは戦後いち早く女性に門戸を開き、差別なく教員に登用してくれた義塾法学部に対する感謝の念とご自身の生涯かけて育て上げた愛する義塾法学部に殉じるという先生の心意気を示すものでもあった。

ご定年後先生はシニア教授会というすべての法学部の定年退職した教員を対象とする集まりをお作りになった。ほぼ二カ月に一回銀座の小さなレストランで昼食をとりながらお互いに元気づけあうという他愛ないが楽しい会だ。歳を取り出無精になったシニア達がいそいそと集まってくる。先生の人間的お力はむしろ現役時代より磨きがかかったように見えた。後釜は金子芳雄先生がお引き受けと伺う。先生が亡くなられてもその意志は続く。

ホテルオークラのあの大きな平安の間での先生を偲ぶ会は法学部と義塾の関係者、ゼミ、クラブの現役、OBたちで立錐の余地もなかった。先生のご人徳が偲ばれる。

名誉教授　堀　江　　湛